●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成 26 年 西雲寺だより 夏号（37 号）

永代経のご案内

7 月 10 日(木)～11 日(金)

10 日 ・・・・・・・・ お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

11 日 お日中(10:00～) お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

法話 小浜 吉田俊宣師

――11 日はバスが出ますのでご利用下さい――

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居経由
坪谷発(9:00)
常森発(9:00)～国見～鮎川～小丹生経由

万障お繰り合わせの上
お誘い合わせて
お参り下さい

親鸞聖人七五〇回御遠忌を厳修し終えて

去る四月二十七日、内陣御修復・宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌が、天候にも後押しされ、沢山の人に参詣していただき、盛大に厳修されました。

当日は、各地の世話方の皆さんは勿論、殿下地区そして地元武周の皆さんには大変なご協力お手伝いをしていただきました。心より厚く御礼申し上げます。福井からお参りされた他門の方が「幼い頃、母親に手を引かれてお寺参りをした時のことが思い出されました。若い人からお年寄りまで地区あげてお手伝いしているすがたを見て感動しました」と言われたことがとても有難く感じられました。

当日は早朝七時半より帰敬式（おかみそり）が執り行われ、七十名の方が受式されました。また午後一時からは、庭儀式（おねり）があり、二百名のかわいいお稚児さんに華を添えていただきました。おだやかな天候のもと、散るのを惜しむように、花桃や桜がまだ花を咲かせており、雅楽の音が響き、庭儀の列が進むすがたは、お浄土の荘厳を見る思いがいたしました。おかみそりを受けて下さった方々は勿論、お稚児さんに参加して下さった子供さんたちも、当日のご縁が尊い仏縁となって下さいますことを念じております。

今回の御遠忌法要には、お内陣修復後も含め多くの費用がかかりましたが、十年計画で積立てをしていただき、その上多分なご寄付もいただきまして、滞りなく勤めることができましたこと、心より感謝いたしております。

御遠忌は勤まりましたが、これで腰をおろしてしまうのでなく、親鸞聖人のご苦労に報いるべく、こころを入れて聞法させていただかなければなりません。ご本願の呼び声を聴聞し、よび声のなかに、念仏申すべき大切なわが身をいただいていくのです。

総代が挨拶のなかで述べたように、五十年後には親鸞聖人の八百回御遠忌が勤まります。子や孫の代にまた盛大に御遠忌が勤まってほしいというのが願いであります。そのためには子や孫に仏法を相続するという大きな使命があるのです。仏法に出遇ったものは。その仏法を相続していくという使命を賜わるのです。愚かな凡夫の身でありますが、大きなお役目をいただいて、与えられたいのちを大切に生きていかなければなりません。

そのためには、仏法が私たちの生活にまでならなければなりません。仏法を聞かせていただいても、それが生活にまでならなければ仏法は伝わりません。「煩悩具足の凡夫」と呼んで下さる如来さまの喚び声に、凡夫としての我が身をいただいていくのです。腹を立て愚痴をこぼすままに、お恥ずかしいことですとお念仏申させていただくのです。そこに念仏生活があるのです。

御遠忌に遇うこころ

（当日の法話をいただく）

親鸞聖人は私にとってどのような人か

人間とは弱いもので一人では生きていけません。それで、何かを拠り所として生きるのです。それで人間は歴史上、絶対的な神を立ててそれに従属する形で生きてきました。また仏さまも不安を除き、幸せを与えるものとして拠り所となってきたのです。しかし今日のように科学や市場経済が発達すると、神や仏に代わって科学の力やお金が拠り所となってきたのです。また戦前は国家や現人神である天皇に身を委ねることが生きる拠り所となったのです。

この度、親鸞聖人の御遠忌を勤めさせていただきましたが、親鸞聖人をどのような方として出遇わせていただいたでしょうか。もし偉大な尊いお方として仰ぎ見る感じで出遇わせていただいたなら、私の生き様とは無関係な人になってしまいます。

親鸞聖人という方は七百年前に、力あるものに支配され隷属し踏みにじられて生きている人々に、人間の尊厳を見い出し、南無阿弥陀仏の前には権力者も庶民も、善人も悪人もみな一つだという世界を開いて下さったのです。親鸞聖人は、私にとってそのような尊い、有難い方として出遇わしていただかなければなりません。

生死する身

私たちは生きることの不安と虚しさの中に幸せと喜びを求めているのですが、その求めているものがはっきりせずに迷っているのです。そのような存在を「罪悪生死の凡夫」といいます。「生死」と書いて「せいし」と読まずに「しょうじ」と読みます。仏教で「迷いをへめぐる」という意味です。それは丁度尺取虫を丸い輪の上に乗せると、いつまでもいつまでもその輪の上をひたすら回り続ける姿が思い浮かばれます。私たちも一生懸命生きているのですが、どうなることが本当の幸せか分からず喜び、悲しみ、苦しみのなかに命終えていくのです。罪悪生死と生死の上に罪悪がついているのは、私たちは生きていく上に罪を感覚しながら生きているのです。私たちは今日まで、どれほどの殺生を犯してきたか分かりません。私たちは命あるものをいただいていのちがあるのです。また殺人や強盗をした覚えはありませんが、どれだけ人の大切ないのちを傷つけ、踏みつけてきたか分かりません。このように、智慧無きが故に「生死」という迷いの生をくり返している存在を、凡夫というのです。苦悩を逃れることのできない存在です。しかし凡夫のところに、生きることの悲しみを感覚しているのです。この悲しみは、喜びや幸せを持ってきても打ち崩せないものです。

帰命…いのちの世界へ帰る

私たちのこのような生死流転していく命の相をどこどこまでも見い出されたのが阿弥陀如来です。毎日お勤めしている「正信偈」の初めの方に「覩見諸仏浄土国　国土人天之善悪　建立無上殊勝願　超発希有大弘誓」とあります。『大無量寿経』によって如来の発願の場面が述べられています。このところが『大無量寿経』において最も大切なところです。如来さまは法蔵と名告った因位の時、寂静のなかで、一切衆生の悩み苦しみ、流転していく相をつぶさに見い出されたのです。覩見とありますが見えてきたということです。大悲の智慧の眼に見えてきたのです。大悲の「悲」という字はうめくという意味ですが、苦悩をしながら流転していく衆生の厳粛ないのちの相に思わず「ウウー」とうめかれたのです。そしてその衆生のいのちに手が合わされたのです。そこに一切衆生を救い取りたいと願いが興されるのです。救い取るためには救い取りたいという如来のまことごころを衆生の胸に至り届けねばなりません。そのために五劫の間思惟し、兆載永劫の修行を要したのです。本願が成就し、如来自ら本願の名号となって「迷いの衆生よ、我身に目覚めて、お念仏申してどうか助かってくれ」と呼び声となって一切衆生に働きかけていて下さっているのです。ある先生は、「本願の名号は生ける言葉の仏身なり」といわれます。如来さまは我々凡夫の耳に聞こえることばとなって私たちを呼び覚ましていて下さるのです。帰命の「帰」には「至」という意味があるのですが「至」というのは空を飛んでいる鳥のくちばしが大地に突きささった状態をいうのだそうです。それによって「帰命」というのは如来の本願の呼び声が私の胸につきささった状態をいうのです。如来の本願の呼び声が初めて聞こえた、頷くことができた、そこに本当に頭が下がり、手が合わされたのです。これが帰命ということです。それは如来の本願に従属したのではありません。一切の衆生を摂め取る如来の本願の世界に呼び戻され、そのいのちの世界を帰るべき世界、真実の拠り所として見い出したのです。帰命は必ずお念仏を具します。このしぶとい頭が下がったら、お念仏が出て下さるのです。私たちは迷いを抱え、不安を抱え、孤独を抱えながら、それを無くして助かるのではありません。その迷いの身こそがお念仏申すべき、大切な身なんだと本願の大地に呼び戻されて、いよいよ生死流転する身をいただき、その身を尽していくのです。そこに人間として生まれて生きることの尊さがあるのです。

親鸞聖人という方は、九十年の人生を通して、迷いの中、苦悩の中に本願の声を聞いて下さった方であり、お念仏に頭が下がった方なのです。その親鸞聖人に出遇わせていただくのが御遠忌を勤めさせていただく意義に外なりません。（住職）

寄　稿

先般の大御遠忌では有難う
ございました

盛大に執り行なわれ誉れ
高き御事とお慶び申します
ご住職様、若院様が並んで
お参りの御姿を拝見し、
感動致しました　私ども一家も
生きご縁を頂きました

有難うございました
まずは御礼申し上げます

大遠忌の御縁いただき嬉しかった
晴れ渡る色鮮やかな稚児行列を
寺念山の大遠忌にみる

文栄

さそわれて　ご縁うれしや　花の寺

畠中町　清水　静子

この間は、七百五十回忌に参らせて貰い本当に有難うございました。お天気も好く最高でしたね。私もこの年になってご縁にあへたのも仏様のお蔭様と感謝の気持ちで一ぱいです。御み堂へ上らせて貰うと余りのきれいなのに身も心も引きしまる思いでした。悪人の私も今日一日でも善人に近づかなくてはという気持ちになりました。おいしい中食を頂き、ごち走様でした。

午後はお稚児さんです。大勢のおちごさんでびっくりしました。ちいさい時から仏様のご縁にあへるのも又有難いですね。私もひ孫が三人出して貰へて嬉しかったです。私、子、孫、ひ孫４代で十人もご縁にあへた事も本当に又嬉しく又有難かったです。

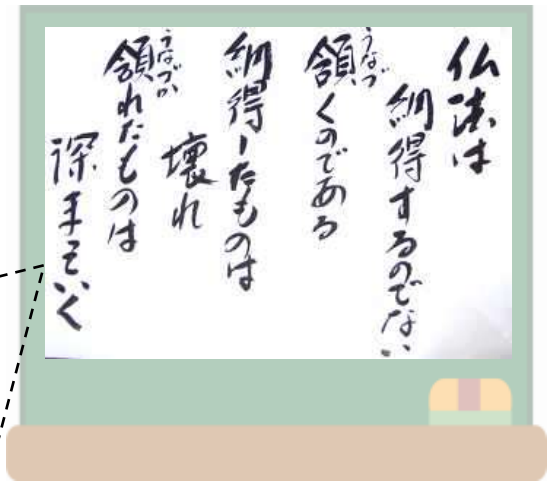
最後になって悪いのですけど西雲寺さんの皆さんのまめにお手伝いする姿を見させて頂きいい勉強になりました。皆さまおつかれは出なかったでせうか。案じて居ります。帰りには帰り土産しゃしんまでとって貰い、本当に有難い一日でした。

福井市　横山　小夜子

仏法を聞かせていただくことは、この自分の頭の中で理解し、納得するまで聞くことだと思っています。しかし、納得することは難しく、納得したものは身につきません。また、納得したと思っても崩れてしまいます。仏法はよき人の仰せを聞かせていただいて頷いていく教えです。お念仏申すということは、納得して念仏申すのではありません。よき人の「お念仏申せ」という呼びかけを受けて「念仏申さん」と決断させていただくのです。そして「念仏申せ」と呼びかけて下さったその心を聞かせていただくのです。決断することにおいて「念仏申さん」と決断せしめた、如来のお心を聴聞させていただくのです。そして「そうでありましたか」と頷いていくのです。納得する心は浅く、頷いていく心は深く、どこまでも限りなく掘り下げられていくものなのです。

（住職）

山門掲示板



私の法名（ほうみょう）どんな意味？

七五〇回大遠忌の日、七十人の方がおかみそりを受けられ、新しい名前（法名）をいただかれました。

おかみそりとは、お釈迦さまの同行になることです。

法名は、もう一つの名前です。三つの漢字にはそれぞれ意味があります。

まず、最初は全員同じ「釈」の字です。同行のしるしに、お釈迦さまから一文字をいただきます。

あとの二文字には、親からもらった名前が入っていることもないこともあります。入っていると、法名に親近感を持ちやすいですね。入っていないと、新しい字を二つもいただけるのですね。これは、どちらが良いということはありません。

次号から、いただいた法名の意味を紹介するコーナーを始めてみようと思います。

すでにいただいた方は、仏壇から取り出して、今一度、ご自分の法名を読んでみて下さい。そこに込められた深い思いを一緒に味わいましょう。

まだの方は、法名ってどんなものなのか、興味津々で味わってみて下さい。

（編者）

西雲寺

大遠忌法要写真集

ご希望の方は連絡下さい

一冊 100 円（12 ページ）

永代経の時にもお渡しできます

ご本山差し向け布教

６月１４日～１７日

お同行宅のお座敷で布教がつとまるのは、全国的にも珍しく、伝統を受け継いでいけるのも、本当に皆さまのおかげです。

滋賀・甲良
宮尾睦雄師

武周　西雲寺お御堂

安田　末定育雄氏宅

本堂　横山忍氏宅

発　行

真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）

住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声　大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。